

◆連載

いま留萌むかし 第四話

●電信架設

電信御架設費之内献納致度儀二付願

札幌ヨリ増毛迄電信御架設之儀計画ノ趣ニ敬承仕候。果シテ然ラバ人民之幸福不過之候。依之別紙調書之通奉献納度候間特別之御会議ヲ以テ右御費用之内御差加被成下度此段奉願候也。

明治二十年十月十八日  
和歌山県紀伊国有田郡栖原村  
当時天塩国留萌郡留萌村三十番地寄留  
平民 栖原角兵衛

代印 山本又三郎  
青森県陸奥国下北部下風呂村  
平民 佐賀平之丞

代印 佐賀庄五郎  
北海道後志国美国郡小泊村  
平民 岩田金蔵

代印 鍋田庄吉  
北海道天塩国留萌郡留萌村  
平民 五十嵐綱治  
北海道庁長官

岩村通俊 殿

これは北海道庁に対して留萌の草創期の有志が電信を引く経費の一部を寄付したいという申し出である。

北海道に初めて電信が架設されたのは明治七年箱館札幌間であった。続いて津軽海峡に海底電線が敷設され、東京札幌間が電信によってつながった。その後、開拓使から三県一局時代を経て、幹線が整備され、道庁時代に入って急速に海岸沿いに架設されていった。明治二十一年札幌石狩間、二十二年に石狩増毛間、二十三年に増毛稚内間が架設され、二十四年から開設された。つまり、二十二年九月に増毛電信局が開局され、二十四年に留萌も開局され、地元利用者の便に供した。

ちなみに、二十四年の留萌の電信取扱数をみると、発信総数二四七件、着信総数二五三件となっている。当時

の留萌の人口が一四〇四人たらずであるから、その利用率は発信で一・七七通に達し、着信で一・八通にも達している。これは明治二十六年の北海道の利用率道民一人あたり一・一三通を上回り、当時の全国の利用率〇・一五通の十二倍に達している。

これは当時の北海道が開拓のための多くの移住者や出稼ぎ者を受け入れていたこと、商取引先が主に本州であったことなどによるのであろう。留萌は当時鯨漁が盛んであり、鯨場の労働を本州に仰いでいたこと、製品の販路が本州であったことなどにより全道平均より利用率が高かったことが考えられる。

また、電信の情報伝達の速さは鯨粕のような相場による値動きの激しいものに対し、有効だったのであろう。これは明治二十四年の電信発信数

が公的なものが一九二通に対し、私的なものが二二五五通もあることから容易に推測がつく。

トンツー、トンツーと響く着信の音が局内にこだまし、片わらでは発信作業に忙しい局員が次から次へと回されてくる電文を処理していく。上場所での初鯨の便りが届く。もう、電信局の鯨漁は始まっていた。今年も大漁だ。局員の顔もほころぶ。



留萌郵便局 (明治時代)